二〇二〇年一二月一九日

冬の蟻長き影ひく石畳　小袖

別腹と言ひ焼藷を頬張りぬ　宏虎

梢みな珠光りせる霜の朝　わかば

落暉映へ炎たつごと山紅葉　よし子

呼び声の道に飛び交ふ師走市　わかば

寒禽の鋭声が射抜く力石　よう子

農学部休耕田に麦を蒔く　かかし

撫で牛に木の実時雨の容赦無し　うつぎ

月冴えて母子観音の白しろと　そうけい

力石木の実時雨を弾きをり　うつぎ

獅子岩の吐きだす朝の冬日かな　素秀

連綿摂津連山紅葉晴　よし子

無人駅柵に真白な干大根　愛正

コロナ禍の月日を重ね早師走　わかば

枯野いまドクターヘリが頭上過ぐ　こすもす

仏花にと冬菊剪つて呉れにけり　はく子

黄ばみたる書を読みなほす漱石忌　かかし

毎週句会秀句・みのる選・二〇二〇年一二月二〇日